2019年度　ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金募集要項

立教大学ジェンダーフォーラムは、本学女子学生寮であったミッチェル館の理念を引き継ぎ、ジェンダーについての教育・研究活動の拠点として 1998年４月に誕生しました。本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者（団体）、あるいは活動・研究を計画している者（団体）を幅広く対象とします。

書類提出期間：2019年 4月 1日（月）～ 2019年 4月 30日（火） 17：00まで※授業期間中は 17：30まで
書類提出先：学生部学生課奨学金窓口（池袋）・学生部学生課奨学金窓口（新座）・独立研究科事務室
採用発表：5月 20日（月）　学生部学生課（池袋）奨学金掲示板、学生部学生課（新座）奨学金掲示板、ジェンダーフォーラム掲示板（10号館通路）に掲示予定
授与式：5月下旬（予定）

（B）活動・研究助成金

対象：学部学生・大学院生（個人・団体）
支給額：総額20万円
採用件数：1～2件
選考方法：論文審査
提出書類：①活動・研究助成金願書＊
②奨学金使途を含む活動・研究計画書（A4用紙　3枚程度　書式自由）
面接日時：2019年 5月 13 日（月）18:30～を予定。個々の面接時間はあらためて連絡する。
面接会場：立教大学池袋キャンパス、16号館第２会議室
備考：採用者（団体）は活動･研究の中間報告を10月末に提出の上、最終的な報告書または論文を翌年1月中旬に提出すること。提出の活動報告書または論文は、ジェンダーフォーラム『年報』に掲載する。

【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金（A）・（B）の申込書（願書）の利用目的】
標記の申込書（願書）で取得した個人情報は、奨学金採用者（団体）の選考および発表のために利用する。採用者（団体）の論文･報告書等は「年報」に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、WEB等に採用者名を記載することがある。
以上に同意した上で、申込書（願書）を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、「プライバシーポリシー：立教大学における個人情報の取扱について」（http://www.rikkyo.ac.jp/privacypolicy/privacypolicy.html）を参照すること。
※ (A) ジェンダーフォーラム論文賞の募集は10月に行います。詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。
ジェンダーフォーラム事務局（池袋キャンパス６号館１階）　Tel：03-3985-2307　E-mail：gender@rikkyo.ac.jp
＊申込書、願書はジェンダーフォーラム事務局、学生部学生課奨学金窓口（池袋）、学生部学生課奨学金窓口（新座）、独立研究科事務室窓口にあります。ジェンダーフォーラムのホームページ上からもダウンロードできます。
（http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/）

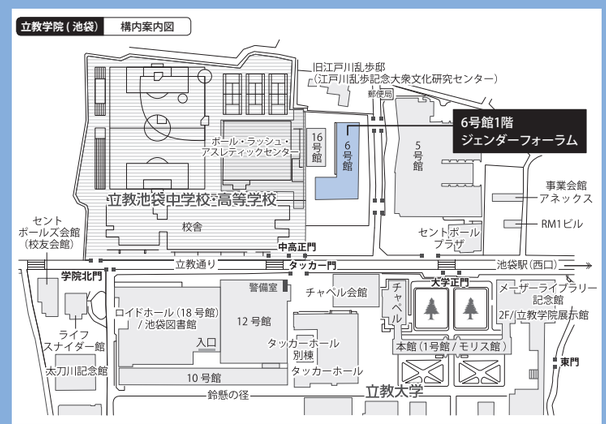
立教大学ジェンダーフォーラムのご案内

「常識」にとらわれず、性差やセクシュアリティ（性自認･性的指向など）についての問題を本音で語り合い、考える場、それがジェンダーフォーラムです。ジェンダー（gender）とは、社会や文化の「常識」にしたがってつくられた性差のこと。「女／男らしさ」「女／男役割」や異性愛を「あたりまえ」とする考え方もそのひとつです。「常識」「あたりまえ」とみなされている性をめぐる社会通念･制度･規範には、一人ひとりの個性的なあり方を抑圧するものが少なくありません。ジェンダーフォーラムは、女子学生寮ミッチェル館（1998年閉館）の精神を受け継ぎ、ジェンダーについての教育・研究拠点として 1998年に誕生しました。ジェンダーに関する身近な違和感をもっている方から学識を深めたい方まで、様々な人に広く開かれています。より多くの人々が、自分自身の問題として社会生活における「ジェンダー」に気づき、理解し、考える契機となるよう、公開講演会やジェンダーセッション、コーヒーアワーなどを開催しています。

20th ANNIVERSARY 1998－2018

開室日：毎週月曜日～金曜日
開室時間：10：00～16：00
場所：立教大学池袋キャンパス６号館１階
TEL&FAX：03－3985－2307
E-mail：gender@rikkyo.ac.jp
URL：http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/

Gender Forum Rikkyo University



詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板または HP でご覧ください。

GEM

Vol.40 2019.3.31
Rikkyo Gender Forum News Letter

20th ANNIVERSARY 1998－2018

Gender Forum Rikkyo University

Gem とは…命名時には本フォーラムがその精神を受け継いでいる立教大学女子寮ミッチェル館（1998年閉館）の “M” にちなんだものでした（Gender Encountering in Mitchell）。現在はさらなる発展を企図して、ジェンダー平等の実現を目指すことを意味する Gender Equality in the Making とし、ニューズレター、メーリングリストの名前として使用しています。

第 76 回ジェンダーセッション（2018年 10月 19日（金））

フィリピン南部における紛争と女性
～「移行期正義と和解」の取り組みは過去にどう応えるのか～

登壇者：ルファ・ギアム氏（Alternate Forum for Research in Mindanao（AFRIM）理事、元ミンダナオ国立大学ジェネラルサントス校教授）

「女性の語りが注目されていない。」
これは、ギアム先生が強調していた言葉である。講演の初めに見たフィリピンのミンダナオ島のバリンバン虐殺の動画では、証言者の多くを占めた女性たちが、兵士にレイプされた、兵士に触られるのに抵抗して殺された、大量虐殺された、目の前で夫が兵士に殺された、子どもが飢えで亡くなった…といった、目を背けたくなるような悲惨な体験を語っていた。食べ物と交換に兵士によるレイプを我慢したという女性もおり、彼女たちは生きることに精一杯であったことがひしひしと伝わってきた。しかし、これらは紛争下で女性の尊厳が失われる過程の一部でしかない。2018年度のノーベル平和賞で武力紛争の道具として使われる性暴力が取り上げられたように、紛争下では占領の象徴として、また敵の生殖能力をそぐために女性へのレイプが多く行われているという。さらに、同じく占領の象徴である強制避難も、避難者の多くを占める女性や子どもをさらに脆弱にしていた。
フィリピン南部の紛争は、フィリピン中央政府に対して、ムスリムを含む先住民の先祖伝来の領域に対する権利の回復を求めて始まった。1970年代から80年代にかけて政府軍とモロ民族解放戦線との戦闘は激化し、バリンバン虐殺が起こった。その戦闘の間、現地の男性はゲリラ戦に駆り出され、女性はゲリラ戦の現場となった居住地で彼らの後方支援等をした。さらに、レイプや強制避難によって、女性の尊厳が失われていった。また、紛争後の平和構築の会議には女性の声が反映されにくく、彼女たちへの支援が不十分になりがちである。また、彼女たちの声を反映させることがこれからの平和構築に不可欠である、とギアム先生は講演を締めくくった。
以前、この講演のファシリテーターの石井正子先生の授業で、ジェンダーは性別関係だけではなく、性別間の権力関係を問う概念であり、だからこそ女性だけでなく、ジェンダーを重視した開発が志向されていると知った。国際協力や平和構築において、一人ひとりにそれぞれの豊かさや幸せを導くために、見落とされてしまいがちな力が弱い人々の声を汲むことが求められているのではないだろうか。そして、ジェンダーという考え方は、マイノリティーや社会的弱者の人をはじめ、私たち一人ひとりが尊厳を持って生きるために重要な道しるべになるのではないだろうか。
私は以前から国際協力に携わりたいと学ぶ中で、援助側（本来協力とは双方向の関係のはずだが…）が自らの価値観が正しい、と被援助側に押し付けるのではなく、現地の一人ひとりの価値観を尊重する重要性とその難しさを感じていた。今回、ミンダナオ島の今と平和構築を知りたくて参加したが、当初はジェンダーにあまり関心がなく、平和構築とジェンダーの関係についてイメージがわかなかった。しかし、ジェンダーは平和構築だけではなく、私たち一人ひとりの身近に関わるものであると気づくことができた。今後は、ジェンダーの視点を新たに持って学んでいきたい。

澤田ちひろ（本学法学部国際ビジネス法学科１年）

ジェンダーフォーラム 20周年記念公開講演会（2018年 12月 22日（土））

ジェンダー視点で福祉社会を拓く――私にとってのジェンダー研究／私にとってのジェンダーフォーラム

登壇者：庄司洋子氏（立教大学名誉教授）、松井明子氏（立教大学元職員）、猪熊弘子氏（ジャーナリスト・一般社団法人子ども安全計画研究所代表理事）

今回、大学での研究の一環でジェンダーフォーラム 20周年記念公開講演会に参加させていただきました。講演会では福祉の視点からジェンダーについて考えることができ、非常に有意義な時間となりました。

講演会の中で1番印象に残ったことは、ジェンダーフォーラムが「運動体」であるということです。この「運動体」そのものがジェンダー問題を解決する糸口になっていると感じました。

「運動体」には、研究所とは異なり、教員と職員の作業が分担されておらず同じ作業をするという特徴があります。一方、ジェンダー問題の発端は、女 / 男を二分し、それぞれに社会的役割を負わせるところです。そのため、ジェンダー問題の解決には、個々人が自由な役割を持つことが必要であると考えています。そのような意味で、役割分担をせず、個々人が随意に活動できるジェンダーフォーラムは、ジェンダーという根深い問題に対する解決の糸口を体現していると感じました。

一学生の私でさえ、未だに社会にはジェンダー問題が蔓延っていることを実感します。そのような社会を変えていくための鍵として、ジェンダーフォーラムは、これまでもこれからも「運動体」としてあり続けるのだと思います。

小林夢佳（早稲田大学文学部 3年）

①

②　③

①：猪熊弘子氏　②：庄司洋子氏　③：松井明子氏

第 1部　「ジェンダーの視点で考える保育～保育は誰のものなのか?」（登壇者：猪熊弘子氏）

第 1部では、育児を行いながら、子育てに関わる社会問題の取材や発信を続けてこられたジャーナリストの猪熊弘子さんをお迎えした。「ジェンダーの視点で考える保育～保育は誰のものなのか?」と題し、近年の待機児童などの保育問題にまつわる事例を、具体的なデータや写真等を用いながらご紹介いただいた。

中でも主に取り上げられていたのは、本来守られるべき子どもたちに被害が及ぶような事例だった。表面上は「待機児童ゼロ」と問題が解消されたように見える自治体でも保育園入園のために親の長時間労働が必須化している問題や規制緩和により待機児童は減らせる反面子ども 1人あたりの保育面積が減らされている現状などである。ニュースの表面的な報道を鵜呑みにしていた自分の認識の甘さや問題の根深さにショックを受けると同時に、「保育は誰のものなのか?」という講演テーマについて深く考えさせられた。

ジェンダーに関するさまざまな問題を解決するための第一歩は、知ること、関心を持つことだろう。創立 20周年に際し、次の 20年も、ジェンダーフォーラムがそのような問題を知るきっかけや議論の場として機能していけたらとあらためて感じた。

杢田　美佳

（ジェンダーフォーラム運営委員／学校・社会教育講座事務室）

第 2部　座談会（登壇者：庄司洋子氏、松井明子氏）

ジェンダーフォーラム初代所長の庄司洋子先生、フォーラム発足に尽力された元職員の松井明子さんに登壇いただき、ジェンダーフォーラム発足当時は学校卒業後に早期に離職し専業主婦を選ぶ女子学生が多かったという社会状況や、フォーラムが立教大学女子寮ミッチェル館運営の理念【自立した女子学生の育成】を継承して発足したという経緯などをお話しいただいた。またフォーラムは、教員と職員が自発的に集い、職種・職位に関わらず活動する「教職協働の運動体」であること、ボトムアップの委員会であることなどをお聞きした。

講演を通して学んだことは、教職員の強い情熱の下にフォーラムが創立したということだ。同時に自身を顧みて、日々の目の前の仕事に追われ、強い情熱をもって物事に向き合う姿勢を忘れかけていたことにも気づいた。私自身はまだ委員に加わらせていただいたばかりだが、フォーラムの原点を知る貴重な機会に恵まれ、意識を新たにすることができた。

これから自分に何ができるのかまだ具体的には分からないが、今回知ったフォーラム創立の経緯とそこにいた方々の想いを胸に、今後の学生支援・ジェンダーフォーラムの活動活性化に貢献していきたいと思う。

三股　恭子（ジェンダーフォーラム運営委員／キャリアセンター）

再び、新たな飛躍に向けて

クリスマス直前の昨年 12月末、ジェンダーフォーラム設立 20周年記念の催しに参加した。

催しは、公開講演会の部分と、その後の交流会の部分とに分かれていたが、講演会の間も、また交流会の時にも、懐かしい顔と声に再会して、立ち上げ当時の熱気が蘇ってきて圧倒された。一瞬、自分が若返ったような気分にもなった。

初代所長の庄司洋子先生、元職員の松井明子さん、松島理恵さん、加藤敏子さん、そして、最初の専従職員を勤めてくれた小野美智代さん。当時まだ学生気分の抜け切れていなかった小野さんは、いまやりっぱな「肝ったま母さん」になっていた。

ジェンダーフォーラムの設立は、1998年 4月だったが、その前の半年間（庄司さん呼ぶところの、助走期間）に職員のみなさんが見せた、大学執行部を納得させるための大胆かつ緻密な作戦と行動には、文字通り目を瞠らせるものがあった。おそらく、それなくしては、「ジェンダーフリーの視点に立った人材の育成を通して、男女共同参画社会の実現に寄与することを目的とし、そのための教育・啓発活動および研究・調査を行うための学内機関」としてのジェンダーフォーラムは生まれなかっただろうし、とりわけ「政策的」に設置されるなどということもなかったのではないか。

私は、ここで「ジェンダーフリー」とか「政策的」にとかいった言葉を使ったが、けっして何気なく使ったわけではない。

まずは、「ジェンダーフリー」という言葉。その後の 20年間の、この日本という国の政治や社会の有為転変を知る人間なら、この言葉とその趣旨をいまなお保ち続けることの困難と勇気とに思いを致さざるを得ないだろう。

では、「政策的」とは、どういうことだったのか。ご存知のように、立教大学ジェンダーフォーラムは、教育・啓発・研究・調査を行う機関ではあるが、しかし、いわゆる研究所ではない。日本のアカデミックな組織にありがちな、教員が主で職員が従という関係を意識的に中止し、「フォーラム」の原義通り、立教大学の全構成員（学生、職員、教員）が自律的に集い議論を交わす場として構想された。このような組織は、「政策的」な決断なしには生まれ得なかっただろう。

すこし長話になってしまい恐縮だが、最後に、講演会の中で松井さんが触れていたことについて、私もまた、是非、言い添えておきたいと思ったことがある。

松井さんの指摘は、2002年 3月、所長退任にあたって私自身が『年報』（第 3号、2001年度）の中で書き記していたことと図らずも重なっていたからである。

「大学のジェンダー政策への具体的な提言の必要」の文言のもとに、「社会においても、またとりわけ立教大学においても、ジェンダー環境は、なかなか改善されないでいる。個人個人の意識構造の転換に向けた努力はいまなお不可欠であるが、しかし、これからは、大学内部の問題、たとえば教員組織のジェンダーバランスの是正など、組織や制度のレベルでも具体的な政策提言がきるように準備を進めておくべき時期にきているのではないか。」、と。

ジェンダーフォーラムを設置した当時、立教大学は、おそらくジェンダー研究と活動における先駆的な大学のひとつであったと思われる。しかしながら、あれから 20年経ったいま、肝心の大学内でのジェンダー環境はどれほど改善されたであろうか。ジェンダーに限らず、社会的な弱者や少数者を排除する文化への批判的な立場は強化されているだろうか。

昨今の社会文化的状況を見るならば「言うは易く行うは難し」であるが、であればこそ、ジェンダーフォーラムの役割はますます重要である。さらなる議論の深化に期待したい。

北山晴一（立教大学名誉教授、ジェンダーフォーラム第 2代所長）